

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720181

研究課題名(和文)文法性判断のずれ及びぶれの発生メカニズムの解明および解消方法

研究課題名(英文)How to resolve grammatical judgment variability

研究代表者

森田 久司(MORITA, Hisashi)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30381742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語のインターベンション効果と呼ばれる現象において、なぜ、母語話者間で文法性判断のずれやぶれが生じるのかを統語的な視点から説明を行った。具体例として、以下のものを参照。

(1) ??{誰も/誰か/健かメリー}が何を買ったの？

上記の例に関して、文法性判断は母語話者間で一致しない。その可変的な性格から、語用論で説明する研究者もいるが、本研究では、日本語のWH疑問文には統語的に2種類の疑問文に解釈ができ(WH疑問文とクイズ疑問文)、その二つを音韻論的に区別することはできない。その結果、正しい文脈を提供しないと母語話者はどちらの解釈で読めばよいのかわからず、文法性判断のずれやぶれを生じる。

研究成果の概要(英文)：This research attempts to explain why grammatical judgment differs among native speakers and provide methods to resolve such an issue. There is a phenomenon called the intervention effect in Japanese Linguistics. Examples are ??{daremo/dareka/Ken-ka Mary}-ga nani-o katta no?everyone/someone/Ken or Mary-Nom what-Acc bought Q'What did {everyone/someone/Ken or Mary} bought?' However, grammatical judgment of the phenomenon is variable among speakers, and this fact leads some researchers to a pragmatic account. Nevertheless, the current research has shown that the phenomenon is indeed syntactic, and the variability arises because the interpretation of the sentence is ambiguous between an ordinary wh-question and a quiz wh-question, both of which are identical phonologically. Accordingly, native speakers cannot decide which questions they have been asked, unless they are provided with proper contextual information.

研究分野：統語論

キーワード：wh-question intervention effect pair-list reading multiple wh-question pied-piping quiz question minimal link condition unselective binding

1. 研究開始当初の背景

問題となるデータから紹介すると、以下のような現象が現在、Japanese Linguistics のみならず、言語学全体で問題となっている。

(I) Intervention 効果 (* は非文、? は * よりはましたが、数が多いほど逸脱度は高い)

- (1) a. 健は何を買ったの?
 b. 何を_i 健は_{t_i} 買ったの? (t は痕跡 (trace))
- (2) a. ??誰も何を買ったの?
 b. 何を_i 誰も_{t_i} 買ったの?
- (3) a. *健しか何を買わなかったの?
 b. 何を_i 健しか_{t_i} 買わなかったの?
- (4) a. ???健かメリーが何を買ったの?
 b. 何を_i 健かメリーが_{t_i} 買ったの?

Intervention 効果からはじめると、(2)から(4)の例文 a に見られるように、「何」などの疑問詞の前(正確には、c-command)に、Intervener と呼ばれる、「疑問詞 + も、か」(例 「誰も」, 「どれも」, 「誰か」, 「何か」 etc), 「NP しか」, 「NP か NP」などの語句を置くと、非文になるという現象である。一方、例文 b が示すように、疑問詞をかき混ぜ操作により、Intervener よりも前に移動すると、非文法性はなくなる。この現象を説明するために、二つの説明方法が存在する。一つは、Hagstrom (1998) や自著である Morita (2009) に見られるような統語的説明で、英語と同様に、日本語の WH 疑問文でも、「誰」, 「何」といった疑問詞と疑問文の範囲(スコープ)をマークするもの(日本語では、終助詞の「か」や「の」)の間に統語処理(Agree)が行われていて、Intervention 効果は、Intervener がその統語処理を妨げるために起こると主張している。もう一つの主張は、Tomioka (2007) などに見られるように、(2)から(4)の例文 a の非文法性は、情報構造違反によるものである。簡略して述べると、(1 a)に見られるように、普通、文は、旧情報(Link)を担う「NP は」で始まり、それ以降に、新情報が来ることが、情報構造的に適切と考えられている。しかしながら、「*誰もは」, 「*健しかは」, 「*健かメリーは」が言えないことから明らかのように、Intervener は旧情報を示す主題の「は」を取れない。したがって、(2)から(4)の例文 a の非文法性は、旧情報になれない Intervener が文頭に来ることが原因であると Tomioka は考える。

(II) Wh-island 効果

次に、Wh-island 効果を紹介する。まずは、

例文(7)を考える。

(7) Q: 健は[昨日メリーがどこに行ったか]知っていますか?

(Yes/No 疑問文としての答え)

A₁: はい、(彼は)知っています。

(WH 疑問文としての答え)

A₂: 駅前の本屋です。

ここで問題となるのは、解釈である。(7)において一般的な解釈は、A₁のように、聞き手が「はい」または「いいえ」で答える Yes/No 疑問と呼ばれるものである。問題は、A₂のように、「どこ」に直接答える形で、聞き手が例えば「駅前の本屋です。」と答えられるかである。すなわち、(7)を A₂のように、いわゆる WH 疑問文として解釈できるかである。(ちなみに、Cf の文だと WH 疑問文の解釈は比較的簡単に得られる。)この点において、母語話者の中で、判断が分かれ、可能という人もいれば、まったく、不可能という人もいる。Wh-island 効果についても、統語的説明および非統語的説明が提唱されている。統語的説明では、Hagstrom (1998) の Intervention 効果の説明をそのまま適用でき、疑問詞が埋め込み節内の「か」と統語処理を行うことは(結果、Yes/No 疑問文が生まれる)問題ないが、「か」は Intervener でもあるために、埋め込み節内の「か」を無視して、主節の「か」と統語処理を行うことはできないと主張する。(7)の下の Cf に見られるように、かき混ぜ操作で、疑問詞を文頭に移動してあげれば、主節の「か」との統語的処理が、埋め込み節内の「か」によって、邪魔されることがなくなるので、疑問文のスコープが文全体に及び、WH 疑問文としての解釈が可能になるのはこのためである。)したがって、(7)は WH 疑問文では、解釈できないという立場を取る。一方、非統語的説明の Kitagawa (2005) によると、言語処理的要因により、疑問文を、黙読で、左から読む際に、疑問詞を認識後、最初に遭遇する「か」を疑問文のスコープと決定するという先入観が働くため、(7)の WH 疑問文としての解釈が困難と主張する。しかし、音韻・文脈情報を加えることにより、(7)の WH 疑問文としての解釈が可能になるとも述べている。

以上、Intervention および Wh-island 効果に対し、統語的説明と非統語的説明があることを示したが、それぞれの説明方法に利点および欠点がある。統語的説明では、ふたつの効果を同じ方法で説明できるが、なぜ、母語話者間に文法性の揺らぎがあるのか説明できていない。さらには、

Tomioka(2007)が指摘するように、統語的に、Intervenerを定義することが未だにできていない。逆に、非統語的説明では、ケース・バイ・ケースで、様々な非統語的な要因を持ち出してこれるために、シンプルな解決法につながらない。しかも、もし、非統語的説明が正しいとすると、母語話者の文法性判断は、人の言語(統語)能力(Competenceともよばれる)のみならず、言語能力以外の側面(Performanceともよばれる)も、文法性を決定することとなり、このことは、言語のモジュール性(すなわち、音声や視覚といった情報を専門に処理する器官が脳内に独立して存在すると考えられているように、統語処理も、それを専門に扱う器官があるという考え方)をもとに文法理論を構築してきた生成文法にとり、大幅な見直しが要求されるからである。認知言語学などは、後者の可能性を追求しているが、一番の解決法として、文法性のゆらぎを説明できる統語的説明を見つけることである。

Hagstrom, Paul Alan (1998). *Decomposing Questions*, doctoral dissertation, MIT.

Kitagawa, Yoshihisa (2005). "Prosody, Syntax and Pragmatics of WH-Questions in Japanese," *English Linguistics* 22:2, 302-346.

Morita, Hisashi (2009). "Covert Pied-Piping in Japanese Wh-questions," *English Linguistics* 26:2, 374-393.

Tomioka, Satoshi (2007). "Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean interrogatives," *Journal of Pragmatics* 39, 1570-1590.

2. 研究の目的

本研究では、自然科学での実験の「結果」に相当する、母語話者の文法性判断の妥当性について考察するものである。科学的アプローチを提唱する生成文法において、母語話者の文法性判断は(方言差などをなくせば)単一なものとして捉えられているが、以下で詳細に述べる Intervention 効果および Wh-island 効果においては、母語話者間のみならず、同一話者の頭の中で文法性判断がぶれやすい。このことは、上の二つの効果が、統語的現象なのか、それとも、非統語的現象なのかによってくるが、本研究では、統語的現象であることを明らかにしたうえで、いかに生成文法の枠組みで母語話者の文法性判断のずれ及びぶれを説明できるか探究する。

3. 研究の方法

初期の計画では、平成24年から25年度と、2年間の研究期間を予定していたが、1年

延長し、平成26年度まで行った。初年度は、InterventionおよびWh-island効果とよばれる二つの現象につき、まずは、統語的および非統語的説明を扱った先行研究を精読し、それぞれの問題点を洗い出す。次に、Hagstrom(1998)、Morita(2009)に見られるように、一見異なる二つの現象を統一的に説明できる統語的説明方法を踏襲しながらも、Tomioka(2007)、Kitagawa(2005)などに指摘されている統語的アプローチの問題点を克服できるような新しい説明方法を提案する。上の提案から新たに導き出される証拠(例文、文脈等)を母語話者に提供し、予想通りの文法判断をするかにより、本提案を検証する。平成25年度では、前年度の成果をもとに、日本語のWH疑問文は曖昧であるとの主張をすることにより、文法性のずれやぶれを統語的に説明する。英語のWH疑問文との比較も行う。また、随時、学会で口頭発表やジャーナルへの投稿を行う。最終年度は、上の知見を日本語と似ている(正確には、古文に酷似)シンハラ語に適用し、現研究で得られた主張を確認し、かつ、日本語との違いを説明する。

4. 研究成果

本研究では、日本語のインターベンション効果と呼ばれる現象において、なぜ、母語話者間で文法性判断のずれやぶれが生じるのかを統語的な視点から説明を行った。具体例として、以下のものを参照。

(1) ??{誰も/誰か/健かメリー}が何を買ったの? (下線は、intervener(WH句に先行(正確にはWH句をC統御)すると、非文を引き起こす句)を指す)

上記の例に関して、文法性判断は母語話者間で一致しない。その可変的な性格から、語用論で説明する研究者もいるが、本研究では、日本語のWH疑問文には統語的に2種類の疑問文に解釈ができ(正WH疑問文とクイズ疑問文)、その二つを音韻論的に区別することはできず、その結果、正しい文脈を提供しないと母語話者はどちらの解釈で読めばよいのかわからず、文法性判断のずれやぶれを生じると主張した。

正WH疑問文とクイズ疑問文を見分ける方法はいくつかある。ひとつは、「その時」を文中に加えると、クイズ疑問文のみの解釈となり、インターベンション効果が観察されなくなる。(2)を参照。

(2) {誰も/誰か/健かメリー}がその時何を買ったの?

また、WH句に「しか」、「だけ」を加えても、クイズ疑問文だけの解釈となる。(3)を参照。

(3) {誰も/誰か/健かメリー}が何だけを買ったの?

ペア読みが可能かどうかも見分ける方法として有効であることがわかった。以下の例を比較のこと。

(4) Q: 健がどっちの少年にどっちの本を読んであげたの？

A: 健がこっちの少年に算数の本を、あっちの少年に英語の本を読んであげました。

(5) Q: 誰かがどっちの少年にどっちの本を読んであげたの？

A: *健がこっちの少年に算数の本を、あっちの少年に英語の本を読んであげました。

「どっち」は二つあるもののうちから一つを答えとして述べる疑問詞であるが、(4)のように、文中に二つ以上の「どっち」を使うとペア読みが可能になることは、英語をはじめ多くの言語で観察されている。不思議なのは、(5)のように、intervenerが主語の場合、ペア読みが不可能になることである。このことは、ペア読みが可能なのは、正WH疑問文の時に限られていることを示し、その際には、すべての疑問詞が潜在的にWH移動を(日本語でも)起こしていることを示す。したがって、(5)がペア読みを許さないという事実は、WH移動が起きていないことを示し、正WH疑問文でなく、クイズ疑問文を話者が選択したために、インターベンション効果も表れないことが説明される。

同様な説明は、WH-islandにも適用できることがわかった。以下の例を比較のこと。

(6) 健は[メリーが何を買ったか]知っていますか

(7) 健は[メリーが何^{だけ}を買ったか]知っていますか？

ここで問題となるのは、(6)において、疑問詞「何」が広い読みを取れるかどうか、すなわち、(6)全体が(Yes/No 疑問でなく)WH疑問文として解釈できるかどうかで、母語話者間の判断が異なる。

この現象に対しても、日本語のWH疑問文には2種類の解釈が可能であるという事実を適用すると、うまく説明ができる。すなわち、正WH疑問文で解釈しようとする、疑問詞「何」は一番近い「か」に移動しようとし、移動後はそれ以上動かないために、主節(の「か」)に移動することはなく、WH疑問文の解釈は不可能であり、英語でも見られるような、WH-islandが日本語でも観察される。逆に、(7)は「だけ」を疑問詞に付加したことにより、クイズ疑問文を形成しているが、その際、疑問詞の移動がともなわないために、主節の「か」と疑問詞が関係(unselective binding)を持つ

ことが可能となる。結果として、WH疑問文の解釈が(7)では、(6)に比べて、容易に得られる。

以上より、インターベンション効果およびWH-islandの説明に当たり、統語的な現象であることがわかった。また、この他に、シンハラ語との比較を行い、上主張が適用可能なことがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

Namkil Kang and Hisashi Morita, "The Acquisition of the Thematic Roles of the English Verb *Open* by College Students," *International Journal of Smart Home* 8.2, 153-168, 2014年8月、査読有

Hisashi Morita, "Large-scale Pied-piping in Sinhalese and Japanese," *Online Proceedings for Workshop in General Linguistics (WIGL) 11*, University of Wisconsin, Madison, 2014年9月、<http://ling.wisc.edu/sites/ling.wisc.edu/files/Morita%20wigl%202012.pdf>、査読有

Hisashi Morita, "The Derivation of Japanese Relative Clauses with Scrambling and Quantifier Float," *JELS (the English Linguistic Society of Japan)* 31, 352-358, 平成26年2月、査読有

Hisashi Morita, "Successive-cyclic *Wh*-movement in Sinhalese and Japanese," 愛知県立大学外国語学部紀要第46号, 111-128, 平成26年3月、査読無

Hisashi Morita, "The *Wh*-island Effect as a Syntactic Phenomenon in Japanese," *Mulberry* 63, 平成26年3月、19-37, 査読無

Hisashi Morita, "Optional Movements Derive Japanese Relative Clauses," *US-China Foreign Language* 11:9, 645-658, 平成25年9月、査読有。

Hisashi Morita, "Different Origins of Quiz Questions in English and Japanese," *Proceedings of the 15th Seoul International Conference on Generative Grammar*, 287-296, 平成25年8月、査読有

Hisashi Morita, "How the syntax knows when to apply binding or movement to *wh*-expressions," *Online Proceedings of GLOW in Asia IX*, 平成25年3月、9ページ、http://faculty.human.mie-u.ac.jp/~glo_w_mie/IX_Proceedings_Poster/10Morita.

pdf, 査読有
Hisashi Morita, "Ultimate Pied-piping in Japanese and Sinhala," *JELS* (the English Linguistic Society of Japan) 30, 313-319, 平成 25 年 2 月、査読有
Hisashi Morita, "Unification of the Semantics of the Infinitive in English," *Miscelanea: Journal of English and American Studies*, vol. 45, 31-52, 平成 25 年 2 月、査読有
Hisashi Morita, "The Intervention Effect as a Syntactic Phenomenon in Japanese," 愛知県立大学外国語学部紀要第 45 号、97-129, 平成 25 年 3 月、査読無
森田久司, 「究極の移動：日本語、シンハラ語における How many/much NP 疑問文の分析について」, ことばの世界、愛知県立大学高等言語教育研究所, 99-110, 平成 25 年 3 月、査読無
Hisashi Morita, "Ambiguous *Wh*-questions in Japanese," *Mulberry* 62, 61-77, 平成 25 年 3 月、査読無

[学会発表](計 9 件)
Hisashi Morita, "Massive Pied-Piping in Sinhalese and Japanese," a paper presented at *the 7th Formal Approaches to Japanese Linguistics*, International Christian University, 2014 年 6 月 28 日発表
Hisashi Morita, "How Unanswerable Questions Turn into Answerable," a paper presented at *GLOW in Asia X*, National Tsing Hua University, Taiwan, 2014 年 5 月 24 日発表
Hisashi Morita, "Large-Scale Pied-Piping in Sinhalese and Japanese," a paper presented at *Workshop in General Linguistics (WIGL) 11*, University of Wisconsin, Madison, 2014 年 5 月 10 日発表
Hisashi Morita, "Different Origins of Quiz Questions in English and Japanese," a paper presented at *the 15th Seoul International Conference on Generative Grammar*, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, 2013 年 8 月 9 日発表
Hisashi Morita, "Different triggers for successive-cyclic movement in Sinhalese and Japanese *wh*-questions," a paper presented at *146th Nihon Gengo Gakkai* (The Linguistic Society of Japan), 茨城大学、2013 年 6 月 15 日発表
Hisashi Morita, "The derivation of Japanese relative clauses with scrambling and quantifier floating," a paper presented at *ELSJ 6th International Spring Forum*, 東京大学、

2013 年 4 月 28 日発表
Hisashi Morita, "Two Types of *Wh*-questions in Japanese: How to lift the Intervention and the *Wh*-island effect," a paper presented at *FAJL (Formal Approaches to Japanese Linguistics)* 6, 平成 24 年 9 月 27 日発表、フンボルト大学
Hisashi Morita, "How the Syntax Knows When to Apply Binding or Movement to *Wh*-expressions," a paper presented at *GLOW in Asia IX*, 平成 24 年 9 月 5 日発表、三重大学
Hisashi Morita, "Ultimate Pied-Piping in Japanese," *ELSJ 5th International Spring Forum*, 甲南大学、2012 年 4 月 21 日発表

[図書](計 0 件)

[産業財産権]
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://morita73.web.fc2.com/>

6. 研究組織
(1) 研究代表者
森田 久司 (MORITA, Hisashi)
愛知県立大学・外国語学部英米学科・准教授
研究者番号：3 0 3 8 1 7 4 2

(2) 研究分担者
なし